

文=五月女善重  
(五月女総合プロダクト)

## 叱られていますか？

体質的にお酒が苦手な僕は、甘い物を好む傾向にあります。先日もファーストフードのシェイクが飲みたくなり、ドライブスルーに立ち寄りしました。

車を停めてメニューを見てみると、社員達の顔が浮かびました。『みんなに買うには何個必要だろう？ フレーバーは何種類かに分けた方がいいだろうか、それとも取り合いせぬよう、一種類にしようか…』などとあれこれ考えるうち、数分が経っていたようです。突然、ドライブスルーの

スピーカーから

「ご注文、まだですか?!? 他のお客様もいらつしやるので…」

と、責めるような、苛立った声が聞こえたのです。あわてた僕はシェイクを一つだけ買い求め、帰社しました。

会社のエレベーターの中で、なぜか笑いが止まらなくなりました。シェイクを片手に「アハハ」と思い出し笑いをすると、社員たちから「どうなさったんですか?」と不思議そうに聞かれても、うまく

説明できずにいたのです。

社長という肩書きを持つ僕たちは、ふだん「叱られる」とか「注意される」といった行為には、無縁な生活を送っています。その僕が、ファーストフード店の若い女性からイライラと苦言を呈されたことがなんと可笑しく、更にさんざん迷った挙句に購入したものがバナラシェイクをひとつ、しかも一番小さなSサイズ、という「自分の小ささ」もリンクして、ツポにはまってしまったのです。

考えてみれば僕は、子供のころから否定を受けることはありませんでした。

竹下元総理のお孫さんがTV番組で「祖父が総理になった途端、周囲からの特別扱いが始まった」と語っていました。僕たちも「二代目」というだけで、生まれながらにして特別扱いを受けていたのでしょう。

父親の経営するパチンコ店で働き始めた二十代前半のころ、

お客様のケンカを仲裁しようとして上司に止められた事はあっても、何か意見を述べた際、若さゆえの的外れな発言でも「違いますよ」と拒絶された記憶はありません。しかしファーストフード店の彼女にとって僕

は単なる注文の遅い客で、社会的地位など関係ない。いわゆる「素の僕」を叱ってくれたのです。

二代目であるとか、経営者であるという矜持をもって皆に接することは重要です。でも、大きな決裁権、言い方は悪いですが、ある程度の「権力」にすり寄る人たちの言葉を顔面どおり受け取っては、裸の王様になってしまいます。心地よい言葉だけに耳を傾け、現実を直視する力を失うと、組織は崩壊し、一生懸命働く社員に迷惑を掛けることになるかもしれません。

肩書きだけでちやほやされるのが、当たり前になっていないか? 営業マンのおべつかを真に受けていないか? 自分のためを思って忠告してくれる友人の言葉を、『やっかみだ』などと思っていないか? 時には「真の自分の姿」を見つめる時間も、僕らには必要なようです。

▲



さおとめ・よししげ

五月女総合プロダクト株式会社代表取締役社長。大学卒業後、父親の営む建築資材会社を経て、26歳でホール業界に。釘調整など現場仕事を経験する中で「自分の代になる」という強い意思のもと2000年に屋号をライブガーデンに変更、2003年代表取締役就任。「スタッフが主役の会社づくり」を掲げ、栃木県南部を中心に現在8店舗を経営。1965年生まれ。